

風船虫

小川未明

青空文庫

原^{はら}つばは、烈^{はげ}しい暑^{あつ}さでしたけれど、昼^{ひる}過ぎになると風^{かぜ}が^で出^でて、草^{くさ}の葉^ははきらきらと光^{ひか}っていました。昨日^{きのう}は、たくさん雨^{あめ}が降^ふつたので、まだくぼんだところへ、水^{みず}がたまっています。もうすこしばかり前^{まえ}でありました。

「きようは、きつとよく釣^つれるよ。」といいながら、徳^{とく}ちゃんは、釣^つりざおとバケツを持^もって先^{さき}に立^たち、後^{あと}から、正^{しょう}ちゃんが、すくい網^{あみ}を^かついでここを通^{とお}つたのです。

年^{とし}ちゃん^{とし}は、毎^{まい}日^{にち}のように川^{かわ}へいくと、おばあさんに^しかられるので、今^{きよう}日は、いっしょにいくのをやめたのでした。二人^{ふたり}が、もう川^{かわ}へ着^ついた時^じ分^{ぶん}、年^{とし}ちゃん^{とし}は、原^{はら}つばへきて、お友^{とも}だちをさ

がしていました。

「やあ、きれいだな。」と、年としちゃんは、水みずたまりのところ立たち止どまって、大空おおぞらの白しろい雲くもが下したの水みずの面おもてに映うつっているのをのぞいていました。

ちようど、同おなじ時じ刻こくに、あちらには、誠まことくんが、さびしそうに独ひとりで遊あそんでいて、年としちゃんを見みつけると、

「年としちゃんおいでよ。おもしろいものがあるから。」といいました。

「なあに。」と、年としちゃんは、もはや雲くものことなど忘わすれてしまつて、その方ほうへ駆かけていきました。

「風船虫ふうせんむしが、いるよ。」と、誠まことくんは、穴あなの中なかを指さしました。

その穴は、このあいだ、みんながボールをして遊んでいると、
 ペスがきて、しきりに前足で掘っていたところでした。
 年ちゃんが、水の中を見ると、黒い虫が、五、六ぴきも底の方
 を往ったり、きたりしていました。

「これが、風船虫なの？」

「ああ、風船虫だよ。」

「君は、釣りにいかなかったのかい。」と、年ちゃんが、誠に
 に聞きました。

「きようは、早くお湯に入つて、お母さんとお使いにいくのだから。」と、誠に、
 誠くんは、いかないうちも、語りました。

「僕、風船虫をお家へ持つていこうかな。」

「ああ、二人で分けようよ。」と、誠くんがいました。

そこで、年ちやんと、誠くんは、紙片の中へ虫を半分ずつ分けて、二人は、めいめいお家へ持つて帰ったのであります。

年ちやんは、風船虫をサイダーの空きびんの中へ入れました。

そして、小さく紙を切つて、水の中へ落としました。すると、風

船虫は、紙片の沈むのを見て、急いでそれにつかまりました。

そして、いっしょに下へ沈んでしまうと、今度は、自分の体を浮

かしにかかったのです。すると、紙片が、ずんずんと下から上

へ引き上げられてきました。やがて水の上まで着くと、風船虫

は、紙を放しました。紙片は、また水の底の方へ沈んでいきま

した。風船虫は、あわてて、これを追いかけるように、銀色

からだひか
の体を光らして、水みずをくぐって下したの方ほうへ泳およいでいきました。そしてまた紙かみを上うえに引ひき上あげにかかるのでした。

「おもしろいな。」と、年としちゃんは、喜よろこびました。しかし、いつまでたつても、風船虫ふうせんむしは、飽あきるということなく、同おなじことをくり返かえしていたのです。

年としちゃんは、しまいには、ごろりと畳たたみの上うえへ寝ねころんで、びんなかの内で風船虫ふうせんむしの体からだが、ぴかぴかと輝かがやくのを見みていました。

「風船虫ふうせんむしって、きれいな虫むしだな。」と、年としちゃんは、つくづく感かん心しんしていました。

そのうちに、年としちゃんは、眠ねむってしまいました。ところが、目めがさめて見みると、びんの中なかには、一ひきも風船虫ふうせんむしはいませんで

した。

「どこへ飛んでいってしまったらどうか。」と、年ちゃんは、しばらく、ぼんやりとしていました。

その明くる日のことでした。年ちゃんは、大きなかしの木の下の、道具箱を下ろして、あしだの歯を入れているおじさんと話をしていました。

「おじさんのところに、学校へいく子供がある？」

「ええありますよ。ちようど坊ちゃんと同じくらいなの。」と、おじさんが、いいました。

年ちゃんは、考えていました。

「おじさんのお家は、町の中にあるんだろう。子供たちは、どこ

で遊ぶあそぶの？」

「やはり、往來おうらいで遊あそんでいますよ。」

「おもしろい虫むしを今度こんど捕とらえてきてあげようか？」

「虫むしですか？ きりぎりすですか。」

「おじさんの知しらない虫むしだよ」

「はて、なんという虫むしですか？」

「風船虫ふうせんむしというのだ。」

「ああ、風船虫ふうせんむしなら知しっていますよ。」と、おじさんは、笑わらい

ました。

「町まちの中なかにも、風船虫ふうせんむしがいるの？」と、年としちゃんは、びつくり

しました。

「わたしいえ きんじよ
私の家の近所に呉服屋さんがありましてね。毎夜ショーウイ
ンドーに燈火をつけますが、燈火の下へコップに水を入れておく
と、風船虫が飛んできて入りましてね、紙片を上げたり、下
げたりして、ひとりでに窓飾りになりますよ。そして、夜が明
けると、どこへか飛んでいってしまいます。」と、おじさんは答
えました。

「ふうん。」と、年ちゃんは、感歎したのでした。

いまさら、この自然の大きいということが、そして、小さな虫
が、自由に、気ままに生活しているということが、なんとなく
不思議に考えられたので、年ちゃんは、思わず、青い、青い、空
を見上げたのでした。

きのう、みず
昨日、水たまりに姿を映した白い雲が、
きょう、あちらの
今日は、あちらの高い
木の上を飛んでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「児童文学」

1936（昭和11）年9月

※表題は底本では、「風船虫《ふうせんむし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風船虫

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>